

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

| | | | |
|----------------|----------------------|----------------|--------|
| 研究科名 | 立教大学大学院 | 観光学 研究科 | 観光学 専攻 |
| 指導教員 | 所属・職名 | 氏 名 | |
| | 観光学部・教授 | 稲垣 勉 印 | |
| 自然・人文の別 | 人文 | 個人・共同の別 | 個人 |
| 研究課題名 | 東南アジアにおけるエコツーリズムの歴史化 | | |
| 研究代表者 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏 名 | |
| | 観光学研究科・観光学専攻・D5 | 須永 和博 印 | |
| 研究組織 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏 名 | |
| | | | |
| 研究期間 | 2006年度 | | |
| 研究経費 | 200千円 | | |

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、東南アジア熱帯林地域におけるエコツーリズムという現象を、植民地主義から今日のグローバリゼーションにいたる森林の資源化という歴史的流れのなかに位置づけ、エコツーリズムと呼ばれる現象を理解する上での方法論的視点を構築することにある。本研究においては、申請者がこれまで調査研究をおこなってきたタイ北部の事例とともに、比較の材料として、隣国の東南アジア諸国における事例を参照することで、エコツーリズムと呼ばれる現象を森林の多様な資源化の一形態としてとらえ、森という社会空間をめぐって生起している多様な文化的・社会的実践を読み解いていくための方法論的視点を構築し、申請者がこれまで調査研究を行ってきたタイ北部における民族誌的資料の理論的考察をおこなう。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[エコツーリズム] [環境主義] [タイ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究代表者の須永和博は、本研究プロジェクトを通じて、過去のべ 2 年半に渡って実施してきたタイ北部山地民社会におけるフィールドワークの成果を博士論文にまとめる作業を行なった。それゆえほとんどの時間を学位論文執筆に費やすことになったが、その際に自身のフィールドワークによって得られた民族誌的資料を理論化するために、環境人類学や環境社会学、観光人類学、社会運動研究、ポストコロニアル理論など多様な研究領域およびフィールドの文献資料の渉猟を併せて行なった。それゆえ本研究費の使途の多くは、そのための文献資料の購入に充てられた。

また筆者は、学位取得後の研究課題として、研究対象をタイ北部地域だけでなく、空間的に徐々に広げていくことで、さまざまな地域の事例を比較・検討し、これまで行なってきた研究の間口を広げていきたいと考えている。具体的には、日本の農山漁村地域、および東南アジア地域(タイ、ラオス、フィリピン、マレーシアなど)において調査・研究を実施したいと考えている。さしあたり学位論文の作業が一段落したのち筆者は、南タイ漁村地域における観光開発について予備的調査を年度末に実施すると同時に、国内における事前調査を継続的に行ってきた。そのため国内の事前調査の過程で当該地域を対象とした文献資料の購入・複写などを行ない、それらの作業にも本研究費を充てることになった。

しかし現段階では、学位取得後の研究には着手し始めたばかりで、十分な成果がすでに得られているとは言い難いので、以下では、2006年10月29日に提出した学位申請論文の概要を記すことで、本研究プロジェクトの成果報告に代えたい。

博士論文の概要**1. 論文の目的**

第三世界の熱帯林は、植民地主義から今日のグローバリゼーションにいたる歴史的過程のなかでさまざまなかたちで資源化されてきた。熱帯林には、木材の「合理的」産出を目的とする科学的フォレストリーの視線や、「原生自然」の保護に絶対的価値をおくエコツーリズムをはじめとする環境主義の視線、生物資源とその知識を手に入れようとするバイオテクノロジーや遺伝子工学の視線といった多種多様な視線が注がれてきた。そしてそれらの熱帯林に向けられた視線は、現地の人々の多様な「生」と交錯し、衝突しながら、森から生活の糧を得る人々の生活に大きな影響を及ぼしてきた。熱帯林とは、植民地主義や国家、グローバリゼーションなどの権力作用のなかで多様な視線が注がれると同時に、それに対する地域住民の抵抗や協働、コンフリクトを含むさまざまな文化的・社会的実践が生起する社会空間、メアリー・ルイズ・プラットの言葉を借りれば「コンタクト・ゾーン」である。

以上のことを踏まえた上で、本論文は、タイ北部の山地民、カレン社会におけるエコツーリズムという現象を題材としながら、森林資源の開発や利用をめぐるさまざまなアクター間の交渉、調整、協働といった文化的・社会的実践について考察することを目的としている。

2. 論文の構成

序章

第 1 章 コンタクト・ゾーンとしてのエコツーリズム—方法論的問題提起

第 2 章 「タイ人」の創出と「カレン」の周辺化

第 3 章 タイ北部における森の資源化と山地民

第 4 章 山地民観光の政治学

第 5 章 タイ北部山地カレン社会における CBT の民族誌

第 6 章 「カレン・コンセンサス」を超えて—NGO 運動における「カレン文化」をめぐる言説と実践—

終章

研究成果の概要 つづき**3. 各章の概要**

まず序章では、本論文の目的や位置づけ、そして民族誌の舞台であるタイ北部地域および現地調査の概要などについて簡単に述べる。続く第 1 章では、エコツーリズムと呼ばれる現象が地球規模で広まっていった背景について論述した上で、本論文において参照する主な研究領域のレビューを行なった。

第 2 章は、本論の民族誌の舞台であるタイ北部山地民社会の概要である。特に山地民のなかでもカレンと呼ばれる人々を中心に、国民国家建設の過程で彼らがどのように周辺化されてきたのか、つまりカレンの人々の「周辺性」がどのように歴史的・社会的・文化的に構築されてきたのかを明らかにした。

第 3 章では、タイ北部において森に対するまなざしがどのように変遷してきたのか、そしてそのなかで山地民と呼ばれる人々がどのように位置づけられてきたのかについて、19 世紀末から今日いたる歴史的過程のなかで論じた。

そして第 4 章では、山地民の観光資源化、つまりタイ北部の山地民が観光というシステムに巻き込まれてきた過程について論述した。

また近年、国家や大資本による森の領有に対抗するかたちで、一部の山地民社会ではローカル NGO と協働で草の根レベルのエコツーリズム開発を行なっている。第 5 章および第 6 章ではこうした観光開発における市民的ネットワークの一例として、タイ北部山地カレン社会の事例をとりあげる。まず第 5 章では、カレン社会の人々がエコツーリズム開発の市民的ネットワークに参加するなかで、生活のなかの利用をとおして身体性のもとで捉えられてきた慣習的行為を環境主義の枠組みのもとで再解釈し、持続可能な森林利用が意識化されてくる過程を明らかにした。そしてこのようなカレンの人々の実践を、環境主義の言説と地元の生活文化との相互反映過程のなかで生まれてきていること、すなわちエコツーリズムのローカル化として定位した。さらには、カレンの人々が、拡大再生産、利潤の最大化といった「事業の論理」とは異なるかたちで観光に関わっており、そのことが結果として観光化による経済的格差の拡大や資本主義システムの従属という問題を回避することにつながっているということを明らかにした。

また第 6 章では、カレンの人々が、エコツーリズムや NGO 運動に参加するなかで、「環境主義」や「持続可能な開発」といった概念について学び、半ば無意識の慣習的实践としての焼畑に反省的なまなざしを向けることで、焼畑というカレンの「文化」が観光という文脈で商品価値を持つと同時に、森林利用権をめぐる闘争において象徴資本となることに自覚的になっていく過程を明らかにした。このことはまた、これまで「言説の資源」をもたないがゆえに、森林資源の開発と利用をめぐる公共圏から排除されてきたカレンの人々が、さまざまな慣習的实践を環境主義という「普遍的な」枠組みのなかで再解釈することを通じて自らの「言説の資源」を獲得するなかで、対抗的な公共圏が生まれてくる過程でもある。

しかし NGO 運動やエコツーリズムに参加するカレンの人々の実践は、外部者によって語られる「森林保護者としてのカレン」という定型化された言説に同一化していくという単線的な過程ではない。本論においては、カレンの人々が NGO 運動やエコツーリズムに参加することを通じて、多様なアクターや技術、知識との折衝を通じて、資本主義的農業開発の弊害やリスク、政府主導の森林政策、環境主義といった概念について学習し、自分たちの置かれた状況を再帰的に思考していくなかで、個々の、さまざまな状況に制約を受けながらも多様な創造的実践を生み出していく過程に焦点をあてた。カレンの人々にとって、エコツーリズムや NGO 運動に参加することは、国家の山地民政策や森林政策のなかで否定的に位置づけられてきた「カレン」「山地民」「焼畑」といった存在を肯定的に捉え直し、「カレンであることの」意味を問い直していく折衝のやむなき過程である。

そして終章では、以上のような主に第 5 章および 6 章で提示した民族誌的資料を冒頭で提起した問題意識のもと整理し直した。

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

なし

② 図書

なし

③ シンポジウムの開催

なし

④ その他

【学位論文】

『タイ北部山地カレン社会におけるエコツーリズムの民族誌的研究』博士学位請求論文、2006年10月、立教大学

【口頭発表】

「カレン・コンセンサスを超えて—NGO運動における「カレン文化」をめぐる言説と実践」

第40回日本文化人類学会研究大会、2006年6月、東京大学。

「少数民族の暮らしと観光—タイ北部の山地民カレンの焼畑とエコツーリズム」

長野大学公開講座「世界のフィールドから考える地域の環境」2006年9月、長野大学。

「環境主義の人類学—タイ北部山地カレン社会を事例として」

首都大学東京・都立大学社会人類学研究会、2006年10月、東京都立大学。